

馬とくらし

9

昔の交通・運搬手段



馬車鉄道

高村あきら氏所蔵

村では古くから、荷駄運びや山仕事、農耕に馬が使われていました。馬は生活に欠かせない人間の次に大切な生き物だったことから、家の中の馬小屋で大切に飼われていました。

また明治時代には、レール上の貨車や客車を一頭の馬が引く「鉄道馬車」が富士吉田から村を通り、御殿場を結んでいました。

そのため、馬の利用がなくなった現在でも、鎌倉往還沿いや屋敷内などの村のあちこちに、愛馬を慰霊するための「馬頭観音」が祀られています。

春は農耕馬、夏は貸馬として使っていた。

馬を使った駄賃稼ぎは主に女性の仕事であった。だから、今でも村の女性は強いのかもしれない。

静岡側からの荷を山中駅でおろして、甲府へ運送していた。

荷駄運びが有名になってから、旭日丘では、観光客を乗せるようになった。

雪の時には馬用のわらじを付けて仕事をさせた。

村のみんなの

声

村周辺では3つの会社の馬車鉄道が運行しており、それぞれ線路の幅が違うため、籠坂峠での乗り換えが必要だった。

かつての馬車鉄道の路線が、今あったら観光的にも面白そう。

現在では、レールや馬車など、鉄道馬車で使われたものは何も残っていない。何かあればよいと思う。

鉄道馬車は、現代で言えばエコ、クリーンな交通手段ではないか。



馬のわらじ 河内晶さ子氏所蔵

掘り起こされた

宝

●馬とくらし

12 鉄道馬車

●馬頭観音

13 旧山中駅

March

3月

鷹丸尾溶岩

10

富士山の噴火が遺したものの



大露頭

9世紀に富士山が噴火して流れ出した鷹丸尾溶岩流により、かつての巨大な湖であった宇津湖がせき止められて山中湖ができたといわれています。

山中では、この鷹丸尾溶岩の先端で岩石や地層が露出している「露頭」を見ることができます。

この露頭では、古くから溶岩石が切り出され、石垣や家の土台として加工・利用されていました。

村のみんなの

声

露頭は、昔の石切り場にもなっていて、切り出した石は家の土台や塀に使っていた。

大露頭の周辺は毎日の散歩コースになっている。

溶岩は地震の時揺れない。

山中登山道に続く細い道は昔、矢沢永吉が歩いていたことから「永ちゃん通り」と名付けた。

山中の共同墓地の裏では鷹丸尾溶岩の「大露頭」が見られる。

大露頭は、伝説では、約1200年前の噴火で溶岩が流れ、山中部落の人々の力で止まった跡という話もある。

永ちゃん通りの西側の樹林は演習場のため入れないが、落葉している季節には露頭がよく見える。

掘り起こされた

宝

14 大露頭

15 石切場跡

16 永ちゃん通り

March

3月

山中の旧道

11

人も馬も貝も絹も行き交った



鎌倉往還

鎌倉往還とは鎌倉と各地を結んだ古道です。

山中地区を通る鎌倉往還は、古くから駿州と甲州を結ぶ物資輸送の幹線道路であり、人はもちろん荷馬車や荷駄を背負った馬が行き交う中継地でした。

湖畔沿いに国道138号が整備されて以降、現在も湖につながる細い縦道や雪代^{ゆきしろ}*対策の溶岩の石垣が残ります。また、8月のお盆には、道沿いの各家の迎火・送火がきれいに並ぶなど、暮らしに欠かせない道となっています。

※雪代とは、火山灰や火山礫などが雨や雪どけ水と共に土石流となって集落に被害を与える災害。山中地区の村道沿いで道より低い土地に家がある所には雪代対策の石垣をつくった。

村のみんなの



声

「縦道」は国道のなかった頃の湖への生活道で、こじんまりしていて歩きたくなる。

鎌倉往還を他の市町村も通して、観光ルートとしてはどうだろうか。

鎌倉往還は、山中登山道、小富士まで続いている。

石垣は今は部分的に残っているのみだが、戦前までは通り沿いにずっとつながっていた。

鎌倉往還のルートは、時代とともに変わってきたという話を聞いたことがある。

駿河から甲府に塩や醤油を運ぶ時、一緒にアワビなどの貝を入れて運んでいた。それが現在でも甲府の名物「煮貝」となっている。

石垣は雪代対策に積み上げた、生ける自然災害の遺物と言える。

生糸も運ばれていたため「絹の道」とも呼ばれていた。

鎌倉往還は駄賃稼ぎの往来がかなり多かった。

迎火・送火は、8月13日～16日まで毎日、鉄板に薪を置いて、それを燃やす。

掘り起こされた

宝

- 17 鎌倉往還
- 18 山中登山道
- 縦道
- 19 雪代対策の石垣
- 村道沿いの迎火・送火

達人
山中まちづくり
委員会

March

3月

ヘダの木

12

家を守るイチイの生垣



イチイの生垣

イチイは、濃い緑色の線形の葉を持つ常緑針葉樹です。寒さに強く、日陰でも育ち、刈り込みにもよく耐えるため、日本全国で庭木や生垣に利用されています。

甲州弁では「ヘダの木」と言い、漢字で「一位」とも書きます。

村では、「村の木」となっており、6月ごろに小さな黄褐色の花が咲き、10~11月に赤い実がつきます。

村のみんなの

声

昔、防火用の木として家の周りに植えた。

火事や風を防ぐため、特に倉の周りに植えた。

火を止める木として、「ヒブセの木」とも呼ばれる。

現在でも、高さ5m近くのイチイで囲まれた家がある。

ヘダの実をよく食べた。食べ過ぎると良くないと言われた。

庭木にされているようなポピュラーな木。

イチイの高生垣がある家では、年に1回、高所作業車で刈りこんでいる。

掘り起こされた

宝

●イチイ

March

3月